ドスイャンクック物語～伝説の大怪鳥(※試作)

曙大仙最果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドスイャンクック物語～伝説の大怪鳥（※試作）

【Ｎコード】
Ｎ９０９２Ｔ

【作者名】
曙大仙最果

【あらすじ】
とあるイャンクックの姿をした一匹の巨大な怪物（笑）が、モンスターハンターの世界で大暴れするだけのお話。
※この小説に主人公として登場するイャンクックは作者の依怙贔屓（えこひいき）によって魔改造（笑）されており、例え相手が古龍種であろうと問答無用で無双します。
以上の点を踏まえた上で、お楽しみ下さい。

――――――――私が“奴”を初めて見たのは、ギルドからの任務を完遂するべく山岳地帯の深部に単身乗り込んだ時の事だった。by. とあるアカム装備の女傑

【目撃情報その01 - 発見、大怪鳥(ドスイャンクック)】

山岳地帯の深部――――――その一角に確認された巨大な洞窟に、得体の知れない巨大生物が住み着いているという目撃情報がギルドに入ってきたのは、今から丁度一週間前。

その日、私は大岩の影に身を顰めて、もう既に目視可能な距離にある件の洞窟の様子を、遠目に観察していた。

「――――――いよいよ、だな‥」

私がギルドより承った任務‥その内容は、洞窟に住み着いた巨大生物に関する目撃情報の確認である。

情報によれば、その巨大生物の全長は100メートル近くあり、

全高に至っては２０メートル以上もあるという。

その話を初めて聞いた時は、驚くより先に『なんだ、そのバケモノは』と内心あきれたものだ。

聞くところによると、近隣の集落在住の幼い少女から齎された信憑性の薄い目撃情報らしいが――――――しかしながら、決して無視出来ない情報でもある。

その情報が本当なら、規格外の巨体を持つ事で有名な古龍種・“老山龍”をも上回る怪物である。　仮に、そいつが人間の生活圏にでも迷い込んだなら、それだけで大惨事になりかねない。

早急に調査を進め、何時来るとも知れない災厄に備えておく必要があるだろう。

「‥ん？」

ふと、見慣れたモンスターの姿が視界の端に映る。

桃色の甲殻と、巨大なくちばし。そして、襟巻き状の大きな耳が特徴的なモンスター。

初心者ハンターが、最初の大型モンスター討伐の目標とする事が多い事から、“先生”とも呼ばれる飛竜種。

――――――――”怪鳥イャンクック”が、そこにいた。

（‥なんだ、ただのイャンクックか）

と、真っ先に思い浮かんだのは、そんな気の抜けた感想だった。

イャンクックは大型モンスターの中でも比較的に弱い部類に入る飛竜種である。

そもそも、イャンクックは鳥の様な外見通りにミミズや昆虫を主食としている為、此方から近付いて刺激しない限りは、そう危険ではない。

先にも説明した通り、初心者ハンターでも充分に狩猟可能なモンスターだ。

凄腕のハンターの中でも優秀な者だけが所属する事が許されるギルドナイト――――その中でも更に最強と謳われている自分の実力を以てすれば、イャンクック程度なら単独で秒殺出来るだろう。

文字通り、何の障害にもならない‥。

「‥ふむ？」

‥筈なのに、あのイャンクックには何か得体の知れない違和を感じる。

それこそ、致命的な‥。

思考の海の底へ沈むこと数秒。

そして‥。

「‥は？」

その違和感の“正体”に、私は気付いた‥、気付いてしまった。

――――――――あのイャンクック、何か滅茶苦茶“デカくね”？

（いやいやいやッ！！　あれは流石にあり得んだろうよ、何だあの馬鹿デカいイャンクックは！？）

全長凡そ９０メートル、全高は２５メートルくらいあるだろうか‥。遠方からの目測ではあるが、それで大体合っているだろう。

丁度、件の巨大生物と同じくらいの大きさである。

‥しかし、有り得ない。

従来のイャンクックの全長は、１０メートルにも満たない。全高も３メートルと無い筈だ。

‥が、目の前の存在は、ざっと見て少なくとも普通の個体の１０倍もの大きさがある。

「なん‥て、非常識な‥」

正直言って、未だに信じられない。

一体、何処の世界に老山龍よりデカいイャンクックがいるというのだろうか。キングサイズどころの話ではない。
…陳腐な表現だが、“ゴッドサイズ”と言ってもいいくらいだ。
突然変異で体が異常に小さい個体が確認される事は極稀（ごくまれ）にあるらしいが、あれ程の巨体を持つ迄に成長したなんて話は聞いた事がない。あっても困るが。

《クエッ？》

不意に、巨大イャンクックが何かに気付いた様に鳴き声を上げて明後日の方向に目を見やる。

「ッ！？」

ビシリッと、思わず体が硬直する。

イャンクックの聴覚は、他の飛竜種のそれより遥かに優れている。それが時には弱点にもなるが、索敵能力に秀でている事に変わりはない。

（気付かれた…か？）

冷や汗が頬を伝う。あんな馬鹿デカいイャンクックを相手に一人で立ち向かうなど、正直いって勘弁願いたい。

戦って勝てない事は無いだろうし、逃げる事も不可能ではないとは思うが‥、その何れを選択しようとも間違いなく“命がけ”になるだろう。

自分の命を何の打算も無く質(しち)に出せる程、私は綺麗な生き方に拘ってはいないのだ。そういう暑苦しい生き方は、若い衆に任せたい。

もう私は若くないのだよ。‥未だに独身だがな、畜生。

「‥む？」

ふと、気付く。

あのイャンクックに近付いていく巨大な――――と言っても、あのイャンクックの半分にも満たない大きさの“影”を一つ見付けて、思わず声が漏れた。

（なるほど‥奴（巨大イャンクック）は“あれ”に反応したのか）

私と、巨大イャンクックの視線を一身に受けている“影”‥。

そいつは、空の向こうから凄まじい速度で滑る様に飛来してきた。

――――――“鋼龍クシャルダオラ”。

銀色の鈍い輝きを放つ金属質の甲殻で覆われた体躯と、前肢と後肢の間に皮膜状の大きな翼を持つ“風翔龍”の別名で有名な古龍種だ。

《ギュアアアアアアッ！！！！》

自分の攻撃の射程内に“標的”を捉えたその瞬間、先制攻撃と言わんばかりに、クシャルダオラが口から“ブレス”を放った。

岩盤をも粉砕する、圧縮された空気のブレス――――――“風翔弾”。

それは、仮に真正面から受け止めようものなら、大型モンスターでさえ一撃で致命打と成り得る必殺の息吹。当たりどころが悪ければ、そのまま一瞬で昏倒させられかねない代物だ。

――――――――だが…。

《クワアアアアアア…》

それは、あくまでも“大型”モンスターであればの話である。

クシャルダオラが攻撃を仕掛けた相手は、“大型”という単語の前に“超”の一文字が付く様な巨大生物――――――いや、既に“生物”という枠組みに収まるのかも疑わしい“怪物”なのだ。

《ク　ワ　ッ　！！！！！》

直後、ドンッ！！！！　という爆発音が山岳地帯の一角に木霊した。

けたたましい鳴き声と共に開かれた巨大イャンクック大きなくち

ばしから飛び出した
直径にして１０メートル近くはあるだろう灼熱のつぶて‥。
その“巨大過ぎる炎のブレス”が、クシャルダオラが放った風翔弾と接触すると同時に起爆し、その爆風を以て全てを吹き飛ばしてしまったのだ。

――――――そう‥、自らに迫ってきていた風翔弾だけでなく、クシャルダオラや、その周囲にあったモノ“全て”を。

「なあッ！！？」

驚愕で叫ぶ。

イャンクックのブレスは、“高熱を帯びた液体を吐き出す”といったものだ。決して“炎のブレス”なんてものは吐き出さない。

あれでは怪鳥ではなく、“黒狼鳥”の様ではないか。

尤も、火力は桁違いであるが。

《ギュ‥、グ‥ウウ‥ッ》

満身創痍といったような、全身の甲殻がひび割れたボロボロの姿で、クシャルダオラが大地に力無く倒れ伏している。

爆風によって吹き飛ばされ、そのまま地面に全身を強かに打ち付けられたのだ。

如何に強靭な生命力を誇る古龍種と言えども、大樽爆弾１０００個分にも相当するだろう大爆発に巻き込まれては、ひとたまりもなかったらしい。
仮に直撃でもしていたなら、古龍骨の一欠片も残さずに完全焼滅していたかも知れない。

（――――――バケモノめ…ッ）

心中で呟く。

あのクシャルダオラの全長は、目測で少なくとも２０メートル以上はあるだろう。キングサイズに迫るか、或いは“そのもの”と言っていい成体である。
熟練のハンターやギルドナイトが小隊を組んで挑んだとしても、相当手こずらされる大物と言えよう。
…それが、たったの一撃で、実にあっさりと無力化されてしまったのだ。

もう驚きを通り越して、呆れるしかない。

つい先程まで、あの巨大イャンクックを相手に一人で戦っても“勝てなくはない”などと考えていた自分が、余りに馬鹿らしい。可笑し過ぎて、盛大に吹き出してしまいそうだ。

――――――――“勝てない”。

“あれ”は、もうイャンクックなどではない。
そもそもサイズからして可笑しいが、それ以上に、あの圧倒的な火力はただ“デカいから”という理由だけでは説明出来ない。

…だが、幸か不幸か、奴は“イャンクック”である。

従来のイャンクックはミミズや昆虫等を主食としており、“火竜”や“轟竜”といった肉食の凶暴な飛竜種と比べれば、比較的大人しい部類の大型モンスターだ。

こちらから余計な手出しさえしなければ、そう危険ではないだろう。

しかし…。

（…それでも、奴が危険である事に変わりない…か）

“奴”は、嘗て私が一人で討伐した“覇竜”以上の巨体と、古龍種の成体を一撃で下す大火力を持ち、更には、従来のイャンクックと同様に飛行能力を有しているだろう。

なるべく音を起てない様に、忍び足で。

周囲を警戒しながら、それでも決して遅くはない速度で一気に駆け抜ける。

――――――――そうして、無事にギルドへ帰還した私は、賜っていた任務の果てに目撃した事をありのままにの上層部に進言した。

そして、件の巨大生物と思われるイャンクックは、後に“ドスイャンクック”と呼ばれることとなった。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9092t/

ドスイャンクック物語～伝説の大怪鳥(※試作)

2011年10月9日08時11分発行